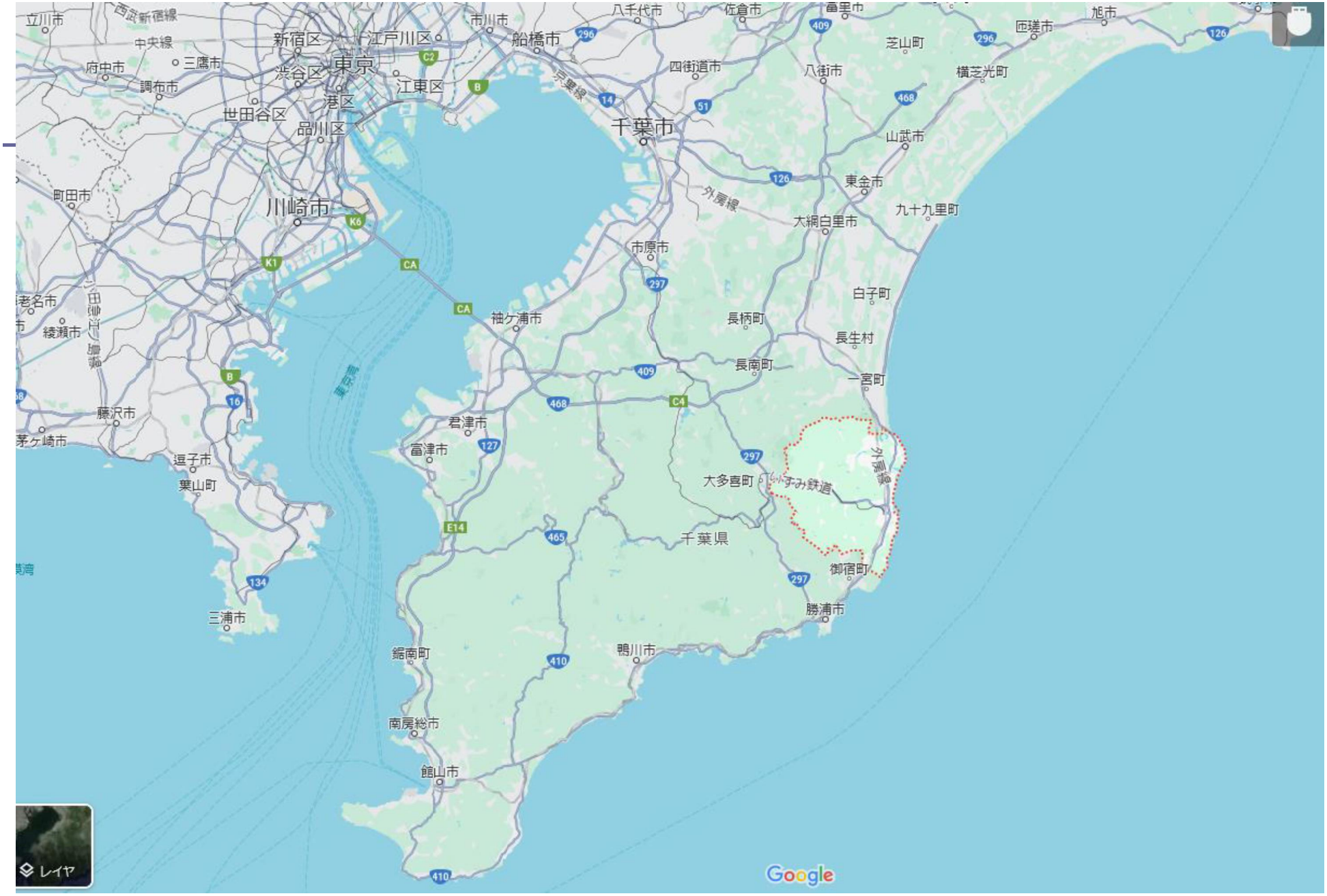
いすみ市の経験から学ぶ

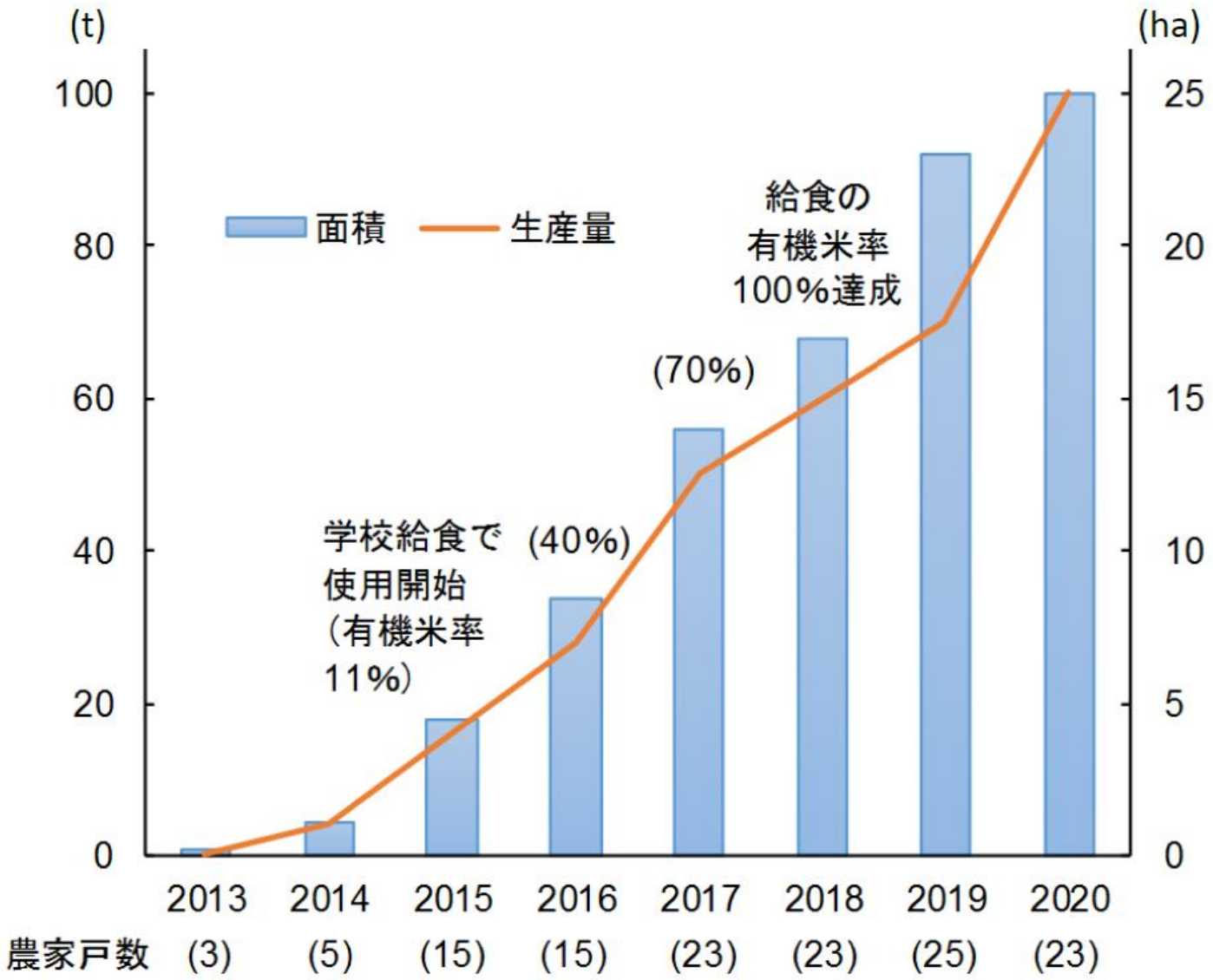
- 市長が有機農業推進を打ち出した（トップダウン）。
- 地域に有機農家がいなかったのに、２年間で有機稲作の技術確立のメドが立ち、その後面積が急拡大したこと（2012年0a → 13年22a → 15年4.5ha → 18年17.1ha）。
- 2017年10月以降、小中学校の学校給食の米が全量いすみ市産の有機米で賄われている。

有機農業の常識をくつがえした画期的な事例だが、オーガニックビレッジの推進にも参考になる。


立川市
西武新宿線
中央線
新宿区
江戸川区
市川市
船橋市
八千代市
佐倉市
亀里市
匝瑳市
旭市
府中市
三鷹市
渋谷区
東京
江東区
調布市
港区
世田谷区
品川区
四街道市
八街市
芝山町
横芝光町
千葉市
山武市
東金市
九十九里町
町田市
川崎市
外房線
大網白里市
市原市
老名市
綾瀬市
袖ケ浦市
白子町
長柄町
長生村
長南町
一宮町
藤沢市
君津市
茅ヶ崎市
富津市
逗子市
葉山町
大多喜町
いすみ鉄道
千葉県
御宿町
三浦市
勝浦市
鴨川市
鋸南町
南房総市
館山市
レイヤ
Google

出典：Google

■有機米生産の推移(いすみ市)



鮫田晋「千葉県いすみ市の有機農業政策、有機米給食とその波及効果」

太田洋市長へのインタビュー（2018年11月15日）

いすみ市で有機農業を最初に始めた矢澤喜久雄へのインタビュー（2018年11月16日）

なぜ市長が有機農業導入を決めたのか

- 米価下落による水田農業の衰退

市長：米価の下落がありまして、現在では１万１千700円から、１万3千円なんです。生産コストは１万５千円くらいですから、生産コストを割ってしまうんです。千葉県で５番目の広い農地を持ついすみ市として農業が衰退するんじゃないかという思いがありました。

- 有機農業導入には躊躇

市長：担当の強い熱意がありまして、じゃあ有機農業をやろうかということで始めて、その時に思ったことは、農家と多分一大戦争が起こるだろうと。なんで今更有機農業をやるんだと。お前は俺たち農家をつぶす気かと、そういう話になるんじゃないかと思いまして、躊躇したんですよね。

市長は「水田農業の立て直し」のために有機導入を決めた。
慣行農家の強い反発を予想していた。

それでも有機農業を導入した経緯

- それでも有機農業を導入した理由

市長：やっぱりこの環境を次の世代に残さなきゃならないと思いました。非常に環境のいい地域だし、地域の市民も非常に環境に強い思いを持った地域なので、そういうぜひ次の世代に残さなきゃいけない。

いすみ市の自然環境を継承したいという思いがあった。

最初はコウノトリを飼おうという思いだったんです。だけども議長が飛んできましてですね、「市長、悪いけどもコウノトリだけは飼わないで欲しい。人の生活の方が大事だと。農業を何とかするのが目的ならいいよ」と言われました。

それで（有機農業の導入に）踏み切って、議会の反対もなかったんだよね。左から右まで全部賛成で、やろうということで始めました。

市長が心配した強い反対は起きなかった。

なぜ有機農業が始まったのか

- 矢澤さんが有機稲作に取り組んだ経緯

矢澤：2013年2月に豊岡の市長さんを招待した講演会が行われて、みんな「すばらしい」「すごい」という感想を持ったんですね。

しかし、よその取り組みを聞いて、すばらしいと思うのはそれはそれでいいんですけど、じゃあいすみ市はどうしますかということがなければ、何も始まらないと思いました。2013年3月、農業部会が開かれたんですね。それでその時に「じゃあいすみ市はどうしますか」ということを話題にさせてもらって。

展望があったわけじゃないけど、とりあえず踏み出さなければ次のステージが見えないということで、「じゃあ私どもの組合で無農薬でとりあえずやってみますよ」ということだったんですね。その次の2013年の時に、私どものところで22アールくらい田んぼで無農薬を始めました。

有機農業を始める動機は「地域の誇り」だった。

なぜ短期間で技術が確立できたのか

- 1年目の結果と感想

矢澤：一年目は、有機栽培について全く無知だったので、ただ農薬と化学肥料を使わなきゃいいんだろうということで始めたわけです。

一番大変だったのは草ですね。私も数字的にはちょっと正確ではないかもしれないですけど、22aの水田で１回６、７人で３回くらい除草作業をしました。

「これは草の芽がなんとかならなきゃ、広げられないな」というのが一番大きな感想でしたね。

除草が最大のネックだということが明らかになった。

しかし、「除草さえクリアできれば可能性はある」という認識に達したということもできる。

なぜ担当職員は政策を実行できたのか

- 担当になった当初の認識

鮫田：（この事業の担当は）私で４人目なんです。１年でみんな担当が変わってしまっていて、私で４人目の担当だったんです。

谷口：なぜそんなに担当がころころ変わってしまったんですか。

鮫田：いわゆる、普通の行政の一般的な感じの担当だったんですね。だから「これはちょっと無理だよ」というかたちで引き継がれたというのは覚えています。「市長がまたこういうすごいことをやって言うんだけど、豊岡とかを見に行ったけど、あんなすごいことはうちはできない」、「農家ができないって言っているもん」というような感じで引き継がれました。

「普通の行政職員なら無理な課題」として、引き継がれた。

担当職員は有機農業をどう見ていたか

- 有機農業に対するイメージは？

鮫田：本当に恥ずかしい話、農業は全く知らなかったですね。農業がこんなにも町の基盤を支えているということもよく分かっていなかったし、日本全体の農業がこれほどまでに先行きが見えない状況に置かれているということが、全然知らなかったです。

農業をまったく知らない人が担当。先入観がなくてかえってよかった。

鮫田：オーガニックについては、なんとなく憧れみたいなのもあったし。ブラウンズフィールドの中島デコさんのところにもよく遊びに行ったりしていました。自分で自炊している頃は玄米を食べたりとか、そういうのは結構好きでやっていましたね。

サーフィンや玄米食を通じて、有機農業に対する感覚的な親和性は持っていた。これが意外に重要だった。

なぜ担当職員は政策を実行できたのか

- どうやって事業のイメージを作ったか？

鮫田：ひたすら事例研究です。毎日夜中残ってインターネットで検索。全部コウノトリの関係で。豊岡の事例はものすごい研究されているし。市長自身が講演しているもの、研究者の論文、雑誌で取り上げられたものとか。

その構造を何とか読み取らなければいけないわけじゃないですか。今までの担当の人は完成形みたいなのを見せられちゃっているから、こんなのできるわけないよと。

でも、最初の一歩というのがあったわけじゃないですか。そこはどこだったんだろうというのを読み取ることを最初はずっとひたすら、一人で残ってインターネットで検索して、読んで読んで。６月の頭まではほぼずっとそんな毎日をずっと。

「最初の一歩」を見つけ、政策実行の手がかりをつかもうとした。

「最初の一歩」は何だったのか

- 最初にやるべきことは何だと思ったか？

鮫田：「有機稲作の実証事業をまず最初にやる」ということを提案したんです。（中略）

11月の半ば課長と2人で稲葉光國先生に会いに行きました。「うちの方でもこういうことをやりたいんですけど」とお話したら、「それだったらいいですね」という返事をいただけて。

後日、市長と課長3人で正式にお願いして、１ヶ月後には稲葉先生の講演会をここでやったんです。１ヶ月しか準備がないんですよ。全部次第を決めて、手紙を何百通と作って農業者にいっぱい出して。そうしたら80人くらい集まりました。

その年に、無農薬栽培がもう草だらけで失敗していましたから。矢澤さんも「来年はもうちょっと除草剤をまこうかな」と言っているし。

無農薬栽培1年目の終わりに、稲葉氏のポイント研修を受けることができた。これが技術確立の決め手になった。

稲葉氏の講演会はどんな影響を与えたか

谷口：2014年１月の稲葉先生の講演会に矢澤さんは来られましたか。

矢澤：行きましたよ。

谷口：講演を聞いてどう思われましたか。

矢澤：役員５人くらいで行ったんですね。それで稲葉先生のお話を聞いて、やっぱり５人くらいで役員が揃って聞きにいったのが非常によかったと思って。

　稲葉先生のお話のなかで、いろいろ稲作の技術の問題よりも農薬の危険性というか、そういうものに対する認識が役員の間で非常に深まったというか、強まったというか。それは非常にいいことだったなと思っているんですね。

稲葉氏の講演を聞いて、有機稲作に取り組んでいた農家の意識が非常に深まった。

稲葉氏の指導はどんな影響を与えたか

谷口：２年目の草はいかがでしたか。

矢澤：稲葉先生がおっしゃる通りにやったら、田植えの後田んぼに入らなくても草がほとんど出ないということに、強烈な驚きを。

大江：眼の前でそれを実感したということですか。

矢澤：そういうことですね。稲の成長に邪魔になるような草は出ないということが、これは本当に、非常に驚きでした。組合としてもこれなら行けると。草が出なければ広げられると思いましたね。

稲葉氏の指導が劇的な効果を上げて、有機稲作の技術確立にメドが立った。

なぜ学校給食に有機米を導入できたか

大江：稲葉さんと出会った段階で「有機米は売れる」というめどはあったんですか。

市長：なかったです。これは作っても売れないと思いました。こんな高い米、こんな手間のかかる米を誰が食べるんだろうかと思って。

　そこで、自然と共生する里づくり協議会でこの取れた米をどうしようかという話をしたときに、ある農家の方が「給食に使おう」と。そこでいいヒントがあったんです。

　そうだ、給食を使えば少し税金を投入しながら農家の育成ができるというヒントを得たんです。仮に農家から２万円で買っても、この２万円分の、例えば学校給食会が買うお米、１俵１万４千円。こちらの米は２万円ですから、１俵６千円の差を、税金で投入してもこれは付加価値ができて、子どもたちに安心で健康なお米が提供できれば、これは市民全てが喜ぶと思って。

　そこで踏み切ったんです。まず学校給食を全量有機米にしろと。

なぜ学校給食に有機米を導入できたか

手塚：稲葉さんの講演をやるというので、僕が司会進行をしていました。（中略）「じゃあこのお米をどうしましょうか」という話のなかで、生産者の方が「子供たちに食べてもらいたい」と。

　そうしたら市長はそういうセンスがあるんですね、「それはいいね」というようなことを言われた。それが一番いいと思ったんでしょうね、その瞬間に。

「じゃあもう全部有機米食べさせましょうよ」と。

　僕はびっくりしたんですけど、このタイミングしかないなと思って、司会役でしたから、

　「市長、ここは公の場ですし、ここで全量有機米でいすみ市が行くということを明言されたということでよろしいんですよね」と言ったんです。そうしたら、市長は「いい」と言ったんです。

市長の中で「有機米を全量給食に使うことが最善の解決策だ」という認識が生まれた。

有機給食が突破口に

- 有機農業を広げる方法として、地元産の有機農産物を給食に使う有機給食（オーガニック給食）が全国で注目されている。

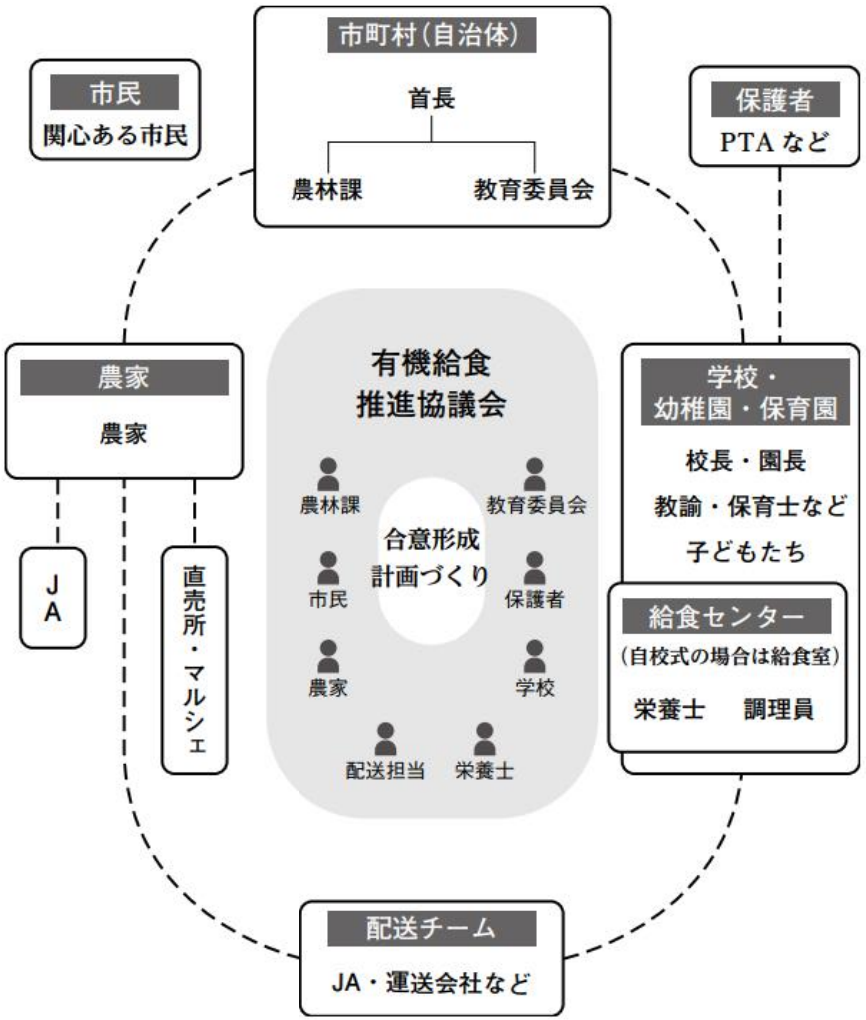
- さまざまな課題をまとめて解決できる突破口として有効である。

鶴理恵子・谷口吉光編著『有機給食スタートブック』
農文協（2023年4月）

有機給食の進め方

- 関係者を集めて協議会を作る。
- 市町村の農林課と教育委員会が連携して、農家、JA、学校、給食センター、保護者、関心ある市民などに声をかける。

図　有機給食にかかわる人と組織の関係（原図：谷口吉光）



出典：霜・谷口編著、『有機給食スタートブック』、114ページ

有機給食の進め方（続き）

- 市町村が「給食で使う有機野菜、米、果物を、農家が再生産できる価格で全量買い上げる」と宣言する。
- 農家にとっては、有機農産物を地元で着実に販売していける「新しい販路」が生まれる。
- 給食で１年間に使う農産物の一覧表を作る。それを目標にして、生産者を増やし、生産計画を作り、技術の勉強を進める。

給食で使う農産物一覧表（愛媛県今治市）

主要食材は1000食あたり約3トン

単位：kg

◎乃万調理場（1,129食）における主要野菜使用量

	人参	玉葱	馬鈴薯	大根	ﾋﾟｰﾏﾝ	里芋	胡瓜	胡瓜（本）	レタス	トマト	トマト（個）	ｱﾌﾞﾗﾅｽ（ﾊﾟｯｸ）	なす
4月	131	288	178	74	0	0	160	0	38	40	0	0	0
5月	408	424	383	129	29.5	0	184	0	84	13	192	0	0
6月	353	538	277	97	21	0	206	0	47	27	0	140	46
7月	193	302	34	43	20	0	106	48	49	37	0	142	93.5
9月	308	431	97	92	19	38	150	0	90	13	285	0	57
10月	357	493	332	129	5	136	167	0	65	33	0	138	0
11月	290	395	171	152	53	126	130	58	62	9	0	131	40
12月	253	397	147	70	26	74	114	49	42	0	192	0	9
1月	286	348	181	200	24	113	114	0	69	24	0	0	0
2月	355	738	398	116	22	122	138	0	63	12	0	165	0
3月	217.5	383	180	127	20	0	112	49	56	12	0	67	0
合計	3,151.5	4,755	2,378	1,229	239.5	609	1,581	204	665	220	669	783	245.5
反収	1,200	3,190	1,730	3,450	1,200	1,650	3,620	—	2,230	6,630	—	—	4,760

出典：安井孝氏の講演資料

有機給食の進め方（続き）

- 給食で使うすべての農産物を１年間有機に切り替えるのが最終目標だが、焦らずできるところから始めればいい。
- 「年１回の有機米の日」「年１回有機カレーの日」を目標にしてはどうか。
- 大切なのは回数や量ではない。有機給食の意味を関係者が理解し、子供に伝えていくことを重視する。
- 子供たちが未来の有機農産物の消費者になる。また、子どもに影響されて親たちも有機への関心を高める。

有機給食の進め方（続き）

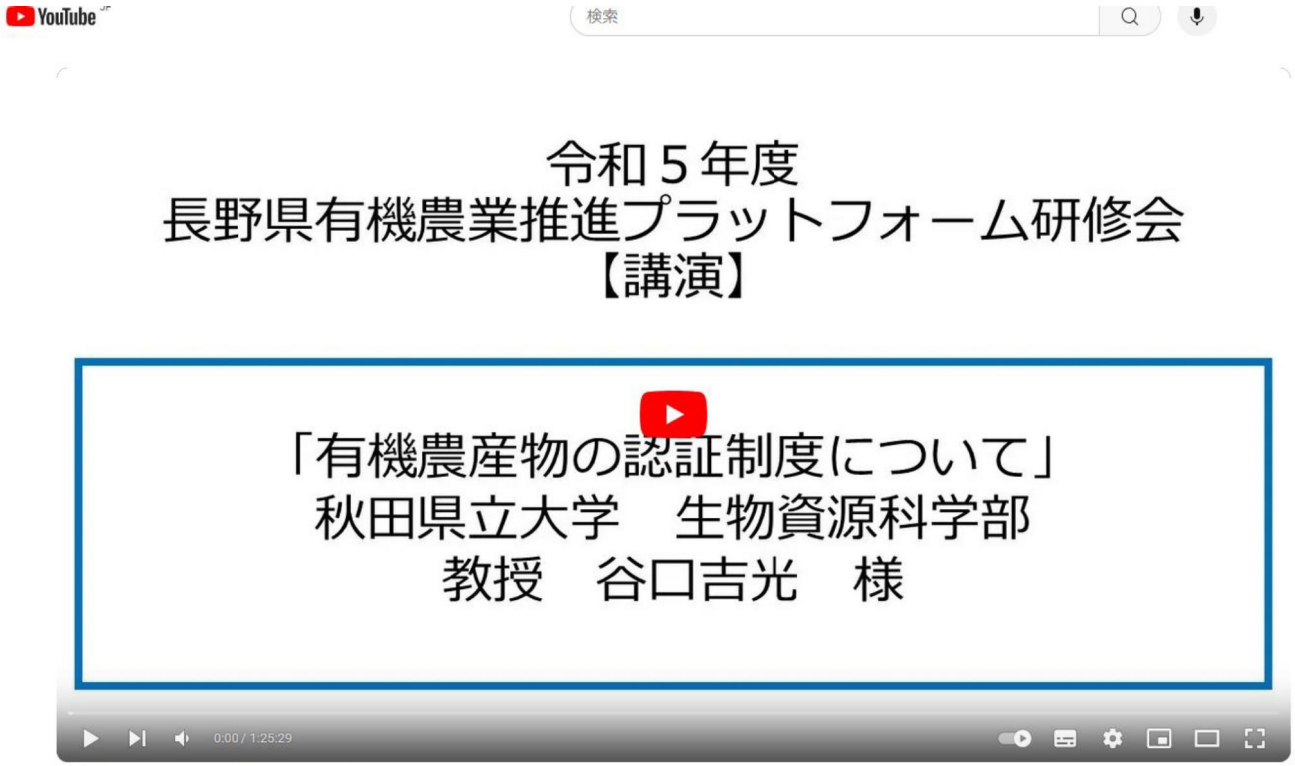
- 給食費と有機農産物の価格差は行政が補填すればよい。最初はそれほど予算は必要ないはず。

- 認証については、さまざまな方法がある。

1. 生産者への信頼（産消提携やブランドなど）
   生産者が有機だと自己申告し、消費者がそれを信じる。
2. 第三者認証（有機JAS認証）
   生産者や消費者とは別の第三者が法令に従って証明する。
3. 二者認証（生協産直など）
   取り引きをしている生産者と消費者が何らかのルールを作って証明する。
4. 参加型認証（PGS）
   地域の団体がIFOAMのルールに従って証明する。
5. 地域認証
   地域の団体や自治体が何らかのルールを作って証明する。

有機給食の進め方（続き）

- 有機JAS認証は必要ない。むしろ、地域の実情に合わせて独自の「地域認証」を作ってはどうか。



R5勉強会「有機農産物の認証制度について」

https://www.youtube.com/watch?v=gbWN8bMYcCs

参考文献

- 桝潟俊子，2019，「持続可能な本来農業に向けた歩み」，澤登早苗・小松﨑将一編著『有機農業大全』，18-22.
- 日本有機農業学会，2021，「「みどりの食料システム戦略」に言及されている有機農業拡大の数値目標実現に対する提言書」.
- 大江正章，2015，「中山間地域こそ有機農業：島根県を事例に」『有機農業研究』，7(2)：4-7.
- 関根佳恵，2021，「小規模・家族農業の優位性：新たな経営指標の構築と農政転換」『有機農業研究』，13(2)：39-48.
- 谷口吉光，2021a，「有機農業を軸として日本農業全体を持続可能な方向に転換する」『日本農業年報』66：263-275.
- 谷口吉光，2021b，「コロナ後の有機農業研究を考える：みどりの食料システム戦略を契機として」，『有機農業研究』，13(1)：2-3.
- 谷口吉光，2021c，「持続可能な社会への転換と有機農業」『季刊農業と経済』2021年夏号：236-244.
- 谷口信和東京大学名誉教授との対談，2021.6.18.【シリーズ：みどり戦略を考える】農業協同組合新聞（https://www.jacom.or.jp/nousei/rensai/2021/06/210618-52087.php）
- 谷口吉光，2021d，「農と食をめぐるパンデミック500日」，『世界』10月号：229-238.
- 谷口吉光，2022a，「第208回国会　衆議院農林水産委員会　参考人質疑資料」.
- 谷口吉光，2022b，「動き出すみどり戦略」，秋田さきがけ新聞に5回連載（ネット閲覧可）.
- 谷口吉光，2022c，「『みどりの食料システム戦略』にどう対応するべきか」，『農業および園芸』97(1)：39-43.
- 谷口吉光，2022d，「『有機農業のパラダイム』とみどりの食料システム戦略の行方」『生活協同組合研究』，Vol.554，2022年3月号：37-44.
- 谷口吉光，2022e，「巻頭言　動き出すみどり戦略：今後の動向と現場の課題」，『有機農業研究』，14(1)：2-3.
- 谷口吉光，関根佳恵，吉野隆子，安井孝，鮫田晋，2022f，「特集　今なぜ，有機学校給食なのか」，『有機農業研究』，14(1)：4-34.
- 谷口吉光，2022g，「レイチェル・カーソンの『沈黙の春』から60年：『みどり戦略』で『持続可能な社会』を目指すには」，生活クラブ生協オリジナルレポート（https://seikatsuclub.coop/news/detail.html?NTC=1000001957）
- 谷口吉光，2022h，「求められる有機農業の再定義：ポイントはすべての生き物を生かし，増やすことにある」，生活クラブ生協オリジナルレポート（https://seikatsuclub.coop/news/detail.html?NTC=1000001958）
- 谷口吉光（編著），2023a，『有機農業はこうして広がった：人から地域へ，地域から自治体へ』，コモンズ.
- 谷口吉光，2023b，「みどりの食料システム戦略は農業をどう変えるか」，関根佳恵編著『ほんとうのサステナビリティってなに？』，農文協，144-145.
- 谷口吉光，2023c，「有機農業に転換するには何が必要か」『第27回セミナー配布資料』，有機農業参入促進協議会.
- 谷口吉光，2023d，「有機農業」，環境社会学会編『環境社会学事典』，丸善：504～5.
- 谷口吉光，近刊，「農政における有機農業の位置づけの変遷から見る日本の農業環境政策の問題点」，『農業市場研究』.
- 靏理恵子・谷口吉光（編著），2023，『有機給食スタートブック』，農文協.